The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	繁華街における周縁的セクシュアリティの受容過程 ー近現代大阪の「ゲイタウン」形成史ー
Author(s)	鹿野, 由行
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69681
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　鹿野由行　　）	
論文題名	繁華街における周縁的セクシュアリティの受容課程 ー近現代大阪の「ゲイタウン」形成史ー

論文内容の要旨

本研究では近現代大阪の都市繁華街における男性同性愛者の集う空間が、各地域の歴史的変遷と地域社会との関係の中で、どのように形成され、また変容していったのかを明らかにすることを目的とする。

1章では本研究についての全体的な見取り図を確認し、近代以降の大阪の繁華街において男性同性愛者の空間が形成された要因と、それをめぐる地域社会とのつながりについて明らかにするために、先行研究を踏まえた上で本研究が留意する点を明らかにした。それは、繁華街を「地域社会」として捉え、戦前戦後を一貫したものとして扱い、セクシュアリティとジェンダーの関係性への注目を行うことであった。それによって近世、近代そして現代へと続く男性同性の性的な関係性の連続性の中でゲイバーを分析し、繁華街の中におけるゲイバーと地域の住民や商店主との関係性を丁寧に読み解くことで、男性同性愛のもつジェンダーという特権を明らかにするという本論の視座を確認した。

2章では、日本の近代化のなかで形成・発展した盛り場である「新世界」・「飛田」・「釜ヶ崎」における、広義の男性同性愛の変遷について明らかにした。本章では、飛田遊廓と新世界をつなぐ異性愛的な「いかがわしい」性的な流れや人々の往来を「性の動線」と定義し、この動線に折り重なるように非異性愛的な男娼による「性の動線」が存在することを明らかにした。敗戦直後の東京では、釜ヶ崎は日本の男娼の総本山とみなされていたが、その歴史は1923年の関東大震災によって東京から多くの男娼が移り住んだことに遡ることができた。1920-30年代の釜ヶ崎一帯の男娼は、その多くが女装をしていた。しかし、実際には男装の者や、少年から大人まで年齢の幅も広く、法界屋などの「芸」を仕事とするものから、裁縫仕事を主な収入源とする者など職業も様々であった。

1930年代から1970年頃までにかけて、大阪では上田笑子を頂点に男娼の組織化が行われ、男娼として街に立つ（街娼となる）場合には上田による許可が必要であった。また1950年代の大阪の繁華街には、それまでの女装を中心とした男娼とは異なる、女装をしない「ノン・プロ男娼」と、「ゲイ・バア」という新興風俗が登場するようになった。この「ゲイ・バア」こそ今日のゲイバーの原型である。その後、女装した従業員が接客する店を含めてゲイバーという総称が用いられるようになり、1960年代には、従業員の服装が女装／男装か、男娼である／ないか、という営業形態によってゲイバーには四つの分類が存在したことが明らかとなった。1970年代になると男性同性愛者専門誌が登場するが、そのような専門誌や一般大衆誌において、非男娼型のゲイバーを女装者によるバーを「ゲイバー」、男性同性愛者による男性同性愛者向けの店舗を「ホモバー」として大きく二つに分類されていた。ここでは大阪におけるゲイバーの分類や呼称について明らかにすることができた。

次に、1960年後半から新世界の再興とともに、非男娼型の女装バーやゲイバーが新世界に集中していったことが明らかとなった。その要因として、第一に商業ビルによる店舗数の増加、第二に「新世界」は特殊な繁華街であるという地域イメージによる排他性、第三に雑居ビルという構造が売買春を行う空間を店舗内に作ることを難しくしたことが挙げられる。この時期から男娼型のゲイバーは衰退し、新世界界隈において売買春は主に街娼たちによって担われるようになったことを明らかにした。

3章では、ゲイタウンを「同地区内にゲイバーが複数存在する状態」と定義し、前半ではキタとミナミと新世界のゲイバー数の比較と、ゲイ雑誌のゲイタウン表象から大阪のゲイタウン形成の時期や地域差の有無について明らかにした。1950年代のゲイバーは繁華街の中で広範囲にわたって散在していた。しかし、1960年代後半から1970年代頃にかけてキタ、ミナミ、新世界の各盛り場の特定の地区にゲイバーやハッテン場が集中し、ゲイタウンが形成されるようになった。1970年代の大阪のゲイタウンではミナミに最もゲイバーが集中しており、また利用者の年齢層は新世界が高く、ミナミ、キタの順で低くなっていた。

次にミナミのゲイバーの変遷を大まかにたどり、異性装をめぐるゲイバーの分離過程を明らかにした。近世では男同士の性的な関係である男色と歌舞伎は密接なつながりがあり、ミナミはそれらの文化的中心地の一つであった。その後、歌舞伎と男色は近代化のなかで分離され、追いやられていく。しかし、歌舞伎と男色のつながりは完全に絶え

たわけではなく、その一部は近代の男娼や、現代のゲイバーの中にも垣間見ることができる。ミナミでは1950年代中頃にゲイバーが開業する。その後、1960年代には女性的な「メケメケ」と男性的な「ボーイ」スタイルに分かれ、1970年代には「ゲイバー」と「ホモバー」として明確に区別されるようになる。「ゲイバー」は従業員が女装をして異性愛者を主な客層として繁華街の中心に店を構えたのに対し、「ホモバー」は男性同性愛者を主な客層とするために繁華街の周縁に店を構え、価格を低く設定することで多くの客を「回遊」させるという営業戦略上の違いが見られた。

後半では1970年代までの、大阪のゲイシーンの中心にあったミナミを事例に、ゲイタウン形成の要因を明らかにした。1950年代の大阪のゲイバーは「男色旅館」とも呼ばれ、宿泊施設が併設されていた。利用客の多くはゲイバーの常連客であった。しかし、1970年代までの男性同性愛者の宿泊施設はキタに1軒、ミナミに2軒であったのに対し、新世界ではサウナや旅館など8軒の店舗が集中していた。ミナミから徒歩圏内にあった。キタの「ホモバー」はミナミに比べて営業時間が短く、夜遅くになると客はミナミに移ることが多かったといわれている。その理由として、ミナミとキタでは「ホモバー」利用者の年齢層が若いのに対し、新世界では中高年層が中心であること。そしてミナミから男性同性愛者専用の宿泊施設の多い新世界までが徒歩圏内であることがあげられる。ここではゲイタウン形成の要因として、宿泊施設が大きな役割を果たしていたことが明らかとなった。

4章ではゲイバーの発展を可能とした地理的条件と、地域住民とゲイバーの関係性がどのように構築されたのかについて、戦後から1970年代までの大阪市北区（キタ）にある阪急東通商店街の変遷の過程から明らかにした。戦後大阪の盛り場や公園には、街娼など「ヤミの女」が出没していた。東通商店街周辺の「ヤミの女」の出没した地域は、扇町公園から商店街を間に挟み映画館や劇場の集中する小松原町を結ぶ直線上にあり、これを＜性の動線＞と定義した。この＜性の動線＞は、男性同性愛者のハッテン場所である扇町公園とニュース劇場を結ぶ動線と重なることから、東通商店街は同性愛と異性愛の二重の＜性の動線＞が存在することが明らかになった。また、両者は進駐軍の兵士の関与があったという点でも共通していた。

後半では、ゲイバーがどのように地域社会とのつながりを形成したのかについて明らかにした。東通商店街では、商店街全体の活性化を目的に商店主によって構成された商店会と、戦前の旧町内会を基盤とした地縁的つながりである町会と、相互扶助を目的としてゲイバーの経営者による寄合組織「北星会」の三つの組織が存在していた。しかし、地域により多くの人を呼び込み商店街の活性化を望む商店会と、男性同性愛者による閉鎖的な同質性の強い空間を求めるゲイバーは、本来まったく性質の異なる存在である。だが、東通商店街では町会の活動を通して商店主やゲイバーの店主につながりが構築されていった。そこでは町会という地縁に基づく関係性が、利益の異なる集団をつなげていた。

5章では、1970年以降の東通商店街が繁華街として大きく発展していく中で、地域住民や商店主、ゲイバーはそれぞれどのような課題に直面し、また対応していったのかを、1960年代後半から2000年代後半までの地域の歴史を概観しながら明らかにした。商店街では1970年の万国博覧会を契機とした商店街の近代化以降、風俗店の増加、治安の悪化や「地縁的結束力」の低下が問題となった。これに対し地域では商店会と住民が協力して違法営業などに対して働きかけるとともに、「文化の拠点」という新たなイメージを発信することで、地域イメージの向上が図られるようになった。次に、1980年以降の東通商店街のゲイバーの増加の要因が、「レジャービル」の建設と男性同性愛者の大型宿泊施設『北欧館』であることを明らかにした上で、一帯が「性的」な意味を持つ空間であり、地理的・空間的周縁性を持っていたことを指摘した。この1980年以降のゲイバーの増加はゲイバーの差異化を促し、従来の組織によるつながりから中心性を持たないネットワーク的つながりへの変容をもたらした。その後1991年のバブル崩壊以降、商店街では再び治安の悪化が問題となるが、商店会や町会では独自の活動がみられるようになる。その活動は地域外へと波及し、地域の枠組みを越えたより大きなつながりを形成していく。次に、ゲイバーではインターネットの登場以降ゲイバーは男性同性愛者の「出会いの空間」としての役割を低下させ、ゲイバーでは差異化がさらに加速されていく。この差異化の過程について、「女性のママ」という新しいゲイバーがどのように他のゲイバーに受けいれられていったのかをインタビューから明らかにした。

最後に6章では、各章をまとめた上で本研究全体の考察を行った。考察では、大阪におけるゲイタウン形成を可能とした条件を、＜性の動線＞、周縁性、インフラの整備（宿泊施設と繁華街の高層化）にまとめた。それは、同性愛／異性愛の性的な空間、日常からの距離、ゲイタウンの時間的空間的拡大とも言い換えることができるものであった。次に、女性同性愛者のためのレズビアンバーとの対比から、ゲイタウン形成の条件の中の男性ジェンダーの特権性について指摘した。最後に、2010年代の「LGBT」をめぐる社会の大きな変化が都市繁華街やゲイタウンにどのような変容をもたらすのか、という問を今後の課題とした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　鹿野　由行　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	北　原　　恵
	副 査	大阪大学　教授	宇野田　尚哉
	副 査	大阪大学　准教授	北　村　　毅

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　繁華街における周縁的セクシュアリティの受容過程
―近現代大阪の「ゲイタウン」形成史―

学位申請者　　鹿野　由行

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　北　原　　恵
副査　大阪大学教授　　宇野田　尚哉
副査　大阪大学准教授　北　村　　毅

【論文内容の要旨】

本研究は、近現代大阪における「ゲイタウン」の形成過程を明らかにする作業を通じてその要因と地域社会とのつながりを考察し、ゲイタウンが形成される諸条件について歴史社会学的に論じたものである。

第１章では、先行研究の検討、課題と分析方法、全体構想を示したほか、繁華街における性的な空間や客の往来の流れを「性の動線」と名付け本論文のキー概念として提起した。

第２章では、日本の近代化のなかで形成された盛り場である「新世界」「飛田」「釜ヶ崎」における男性同性愛者の空間の変遷について明らかにした。日本の「男娼の総本山」と言われる釜ヶ崎の歴史は、1923 年の関東大震災によって東京から多くの男娼が移り住んだことに始まるが、釜ヶ崎や飛田を中心に栄えたこれらの男娼や女装者などの周縁的セクシュアリティの人々は、敗戦後、新世界へ移動していく。1950 年代には女装をしない「ノン・プロ男娼」と、男性同性愛者が集まる新興風俗の「ゲイ・バア」が登場し、これが近代大阪におけるゲイバーの誕生となった。1960 年代後半以降、新世界の再興とともに非男娼型の女装バーや「ホモバー」が新世界に集う一方で、男娼型ゲイバーは衰退した。

第３章では、1970 年代に大阪で最もゲイバーが集中する大阪市中央区（南区）の繁華街・ミナミを中心に分析を行った。1950 年代前半に繁華街の中で広範囲に散在していたゲイバーは、1960 年代後半から 1970 年頃にかけてハッテン場の増加とともに数を増やし集中化を始め、ゲイタウンを形成する。1970 年代にはミナミに最もゲイバーが集中するようになったことを、住宅地図や変態雑誌、商業ゲイ雑誌などの情報を検証することによって明らかにした。（1979 年、ミナミに 87 軒、新世界に 45 軒、キタに 38 軒のゲイバーが存在。）

第４章では、敗戦後から 1970 年代までの大阪市北区の阪急東通商店街の変遷をたどることによって、キタのゲイバーの発芽を可能にした条件について、ゲイバーの経営者による寄合組合「北星会」や地元の商店会、町会の活動を調査し地域とゲイバーのつながりを分析することから明らかにする。東通商店街周辺で「ヤミの女」と呼ばれた街娼が活動した地域は、映画館や劇場の集中する小松原町・北野劇場―東通り―扇町公園を結ぶ直線上にあり、この動線がゲイ男性の「性の動線」と重なることを指摘した。

第５章では、ミナミからゲイバーの集中する地域がキタに移動した 1980 年代以降、ゲイタウン化する堂山町の歴史と要因について考察した。レジャービルの建設や男性同性愛者の大型宿泊施設の登場によって東通商店街・

堂山町のゲイバーは急増するが、それはゲイバー間の差異を拡大し同業者同士や地域とのつながりを希薄化させていく。さらに1990年代後半のインターネットの発達は、男性同性愛者の「出会いの空間」としてのゲイバーの役割を低下させ差異化を加速させた。

第6章では、大阪のゲイタウン形成の諸条件として①性の動線、②周縁性、③インフラの整備の3要素を挙げた。すなわち、①異性愛的な性的な空間や訪れる客の往来である流れを示す「性の動線」と、男性同性愛者のハッテン場やゲイバーをつなぐ「性の動線」が重なり合うこと、②男性同性愛者たちが隠れ集う「クローゼット」な空間の形成を可能とするため、盛り場の中心から離れた周縁に位置する必要があること、③最初期にはゲイバーと一体化していた宿泊機能がハッテン場や旅館の登場によって分化し、繁華街のビルの高層化によるゲイバーの店舗数の増加したことが、ゲイタウンの形成と空間的・時間的な拡大を可能にしたと結論づけた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の特徴の第一は、1920年代から2000年代初頭までの大阪市内の男性同性愛者の集う空間の変容とゲイタウンの形成史を初めて歴史社会学的に明らかにし、その調査を踏まえた上でゲイタウン形成の条件を抽出しようとした点にあり、すぐれてオリジナリティに富む論文といえる。1950年代に大阪市内にゲイバーが誕生し、1960年代後半から70年代にかけて特定の地区にゲイバーが集中してゲイタウン化し、さらに釜ヶ崎・飛田・新世界からミナミ、キタへとその中心が移動していく有様を、店舗数の概数を割り出し地図化する作業を通じて具体的に明らかにした本研究は、ゲイタウン研究の新たな地平を切り拓く労作である。

従来の日本における都市研究では、都市の多様性を扱う場合にもエスニシティをめぐる調査が中心であり、セクシュアリティの視点は弱かった。一方セクシュアリティ研究では、雑誌の言説分析を中心とした近代日本における同性愛の概念の分析が中心であり、新宿二丁目を対象とした文化人類学的アプローチがあるものの、他の近隣地域と関連づけながらゲイタウンの形成史を論じた研究は存在せず、総じて地方での実証研究は乏しい状況であった。またアメリカやカナダのゲイ・コミュニティ研究では1960年代のゲイ解放運動との関わりが重要視されているが、解放運動の歴史とコミュニティ形成の過程の異なる日本での実証的調査研究を大きく推し進めたことは特筆される。

第二の特徴として挙げられるのが、長年のゲイバーでの参与観察と関係者との信頼関係、それにより可能となったインタビューやフィールドワークの積み重ね、そして徹底した資料収集と社会学的手法によるデータ化である。住宅地図と照合しながら、何種類もの雑誌のゲイタウンマップや情報を比較検討し、さらにフィールドワークとインタビュー調査も加えて検証した上で、一軒一軒ゲイバーの所在地を突き止めていく調査手法は斬新であり、本論文の大きな成果を生み出した。

とはいえ、いくつかの問題も存在している。まず、釜ヶ崎やミナミにおけるゲイバーや男性同性愛者たちの空間と地域とのつながりの検証が不十分であること、そして扱う史資料のさらなる史料批判と検証が必要であることが挙げられよう。また本研究が提起した「性の動線」という概念についての普遍性の検討とジェンダーの視点からの理論的解明、ゲイバーの利用者の聞き取りの必要性、移動する芸能民に関する民俗学の知見の参照なども指摘された。しかしこのような点は、いずれも今後の課題であり、一層の研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。